

# “断裂”行動

——その理想と現実——

瀬 邊 啓 子

## 要 約

1998年、南京の作家である朱文を中心として、“断裂”行動と呼称される活動が行われた。この活動は全国の青年作家73人に対して、13項目のアンケートを送付し、その結果を公表するというものであった。本稿ではこの活動が直面していた現実と目指した理想を通して、“断裂”行動の意義と結果について分析を行った。

“断裂”行動のアンケートの内容は、既存の文壇に対しての不満や自由な創作が行えない環境への批判、評論家の未成熟さを指摘するものなど、多岐にわたっていた。アンケートの文面は、いずれも否定的な回答が出るようにアンチテーゼの形式がとられており、その上“根本的”という文言が入られるなど、アンケートの結果が恣意的に否定的なものになるように導かれていた。またアンケートの最後の項に、朱文特有のユーモアを込めた「遊び」の質問を設けていた。この質問は朱文による既成概念への挑戦でもあったが、朱文の作品スタイルそのものであり、また“断裂”行動の性格が排他的であるということを象徴するものでもあった。

この活動を通して、朱文たちは金銭面や創作環境を含む青年作家の置かれた状況への不満を表明しただけではなく、当時の中国文壇への挑戦を表明した。この行動は、既存の体制にあらゆる面から否やを唱えた「拒絶」の表明であったのである。

ポスト“断裂”行動としては、朱文たちは叢書の出版など活動を継続してゆくのだが、活動は次第に尻すぼみになる。一方、韓東は橡皮文学網を創設するなど、冷遇されている青年作家、特に詩人への積極的な支援を行っていた。その活動は成功したとは言えなかったが、韓東の活動は継続されてゆく。つまり“断裂”行動は朱文が始めたものの、すぐに朱文はカリスマ的な性質を持ったシンボリックな存在と化し、活動そのものは韓東が引き継いだと言っても過言ではない。このことは“断裂”行動の最中にも見られるのだが、ポスト“断裂”行動としては完全に活動の主体が韓東へ移動したと言える。

そして“断裂”行動が大きな力を持ちえなかった理由としては、この行動は朱文を支持する仲間内の行動にとどまり、彼らが積極的に外部に働きかけなかったことにある。本来であれば影響力を持った人気作家の参加を求めれば、活動をより広く展開できたであろう。しかし彼らはそういった既存の作家に対しても否定的な態度を取っていたために、“断裂”行動は「閉じた」活動で終わってしまい、継続的な活動も非常に限定的で公的な力を持ち得なかった。つまり“断裂”行動は世代の断裂の宣言ではなく、自他の断裂であり、すべての体制への「拒絶」の宣言でもあったと言えるのだ。

キーワード：“断裂”行動、朱文、韓東、ポスト“断裂”行動、拒絶

## 1. はじめに

1998年、南京の作家である朱文と韓東を中心に、“断裂”行動<sup>1)</sup>というアンケートを通じた、様々な活動が行われた。このアンケートの公表はいくつかの新聞や雑誌で行われたが、完全なものが発表されるまでには紆余曲折を経た。完全版を掲載した『北京文学』（1998年第10

期)では、1998年を「特殊な一年」<sup>2)</sup>と位置づけ、60年代以降に生まれた青年作家が起こしたこの行動を発表することの意義を説いた。

しかしこの行動は、新聞紙上などで討論が行われ、一部で話題になったものの、中国の文壇全体に大きな影響を及ぼすことはなかった。それはどうしてなのだろうか。

本稿では、“断裂”行動とその後の活動を通して、これらの行動の意義と行動がもたらしたものについて概観する。そしてなぜこの活動が大きな力を持ちえず、一部の青年作家の支持を得るのみで終わったのか、この点について分析を加えることで、“断裂”行動そのものの意義と影響について見てゆく。

## 2. 朱文と韓東

“断裂”行動は、1998年5月1日に朱文が行動を思い立ったことに始まる。そこで朱文を中心として、韓東らと話し合った結果を反映させたアンケートが作成された。同年5月10日過ぎにそのアンケートは、73人の青年作家に発送されたのである。

最終的に朱文がアンケートの結果をまとめ、韓東が「備忘：有關“断裂”行為的問題回答」(『北京文学』1998年第10期)を書くことで、“断裂”行動の主旨の整理や疑問点への回答を行っているように、“断裂”行動の主たる動きはすべて朱文と韓東この二人に起因すると言っても過言ではない。

まずここでは朱文と韓東について、簡単に見ておきたい。

### (1) 朱文

まずは“断裂”行動の「顔」とも言うべき朱文について見てゆく。

朱文は1967年12月に福建省泉州市に生まれた。その後、両親とともに江蘇へ移り、江蘇省宝応県にて幼年期と少年期を過ごした。85年、東南大学動力工程科に進学し、89年に大学を卒業後、南京の火力発電所に配属された。94年に職を辞して、「自由作家」となった。自由作家とは、中国作家協会に属さずに創作活動をする作家のことである。

大学在学中から小説や詩歌の創作を始めたが、89年に同級生であった呉晨駿<sup>3)</sup>と詩作の仲間となった。その後韓東らと知り合い、“他們”文学社団に参加した。1991年下半年から正式に小説を創作し始め、91年に書いた「美国, 美国 [アメリカ, アメリカ]」という作品は中国国内では発刊していない雑誌『今天』<sup>4)</sup>に掲載されたのだが、このころ朱文と韓東は詩歌や小説を、しばしばこの『今天』で発表していた。朱文は詩歌や小説に限らず、映画の脚本なども手掛けており、映像に関わる作品も多く手掛けている。脚本を手がけた映画『巫山雲雨』(章明監督, 1995)は国際的な評価を受けている。近年では脚本だけではなく監督も手掛け、映像作品にも積極的に参加している。

朱文の創作姿勢は斜に構えたような印象がある。暴力や性など、アウトローな雰囲気や漂わせつつ、どこか社会からドロップアウトした青年たちを描き出す。

彼の代表作である「我愛美元 [米ドルを愛す]」<sup>5)</sup>では父親と息子の関係を通して、主人公の「わたし」の墮落した生活や女性関係、金銭感覚などを暴いてゆく。冒頭部は、父親が「わたし」の部屋を訪ねてくると、息子と王晴という女性が一緒に寝ているところに遭遇してしまうところから始まる。さらに主人公が父親に商売女をあてがおうとする場面では、父親の常識的な反応から「わたし」との世代間のギャップが浮き彫りにされている。

しかし朱文の筆は妥協を許すことなく、作者である朱文自身をも皮肉を込めて描きだす。それは劇中劇とも言うべき場面で、主人公が見た恋愛映画がありきたりでつまらないものであったことを述べた上で、映画のエンドロールで流れた脚本家の名がまさに「朱文」という人物であると明かす場面に表れている。創作者である自分をも皮肉を込めて登場させることで、ある種の既成概念を打ち砕こうとする朱文の姿がよくうかがえる構造と言える。

朱文の作品における「救い」は、彼の作品でも何度か登場する「弟」との関係である。「我愛美元」でも弟が登場する。弟は音楽の道を目指し、学業を捨てようとしていた。父親は兄である「わたし」を頼りに、弟を説得しようと兄弟を訪ねて来たのだった。「わたし」は無名ながらも作家活動をしており、弟からすれば自分の将来を自由に選択した兄は憧れであり、よき理解者として映る。「わたし」は弟には音楽の才能があることを認めてはいるものの、家族の「兄」としての立場から弟を説得する義務を遂行しようとする。「わたし」は普段から家族とコミュニケーションをとっているわけではないのだが、父親とも弟とも関係は希薄ではなく、根底には厳然とした「長男」としての感覚を有しているのである。

そのため常識的な観念とは違ったものの見方をすることはあるのだが、家族を思う気持ちや家族との関係性から、一見すると世間から隔絶したところにいるような「わたし」が極めて平凡な側面を持つ人物として捉えることができるのである。つまり「わたし」の逸脱はどこか感覚的にアンバランスな部分を持つ青年の一人にすぎないと映るのだ。

「我愛美元」では作家朱文を皮肉まじりに書いていることは前述したが、実はもう一つ仕掛けがなされている。主人公である「わたし」はあまり知られていない作家であるのだが、名前は記載されていない。しかし弟は「朱武」という名前であることが後半部で明かされている。つまり「わたし」は実は「朱文」ということになるのである。作者である朱文と主人公「朱文」、そして三文映画の脚本家朱文と、三人の朱文がいるのだが、それぞれ別の存在として存在しながらも、実は同じ人物でもあるという構造を取っているのである。

「我愛美元」のなかで見られるように、朱文はどこかアンバランスな感覚を持った世界観を出現させながらも、少し世間からはみ出てはいても「兄」という意識に支えられた義務感を持つ性格を打ち出すことで、青年の持つアンバランスな精神状態を実はバランスよく配している。そして自らをもシニカルに描くことで、現実の不条理や不満をアイロニーたっぷりに描き出す

ことを得意としている。

そして作中人物に見られるように、「長男」であり「兄」である朱文の作品にはどこか兄貴分の気質を持った登場人物がよく描かれている。この作中に見られる「兄貴分」の気質は朱文自身にあてはめられて再構築され、作家朱文を「兄貴分」として慕い、彼の言説に呼応する青年作家たちを生んでいる。武俠小説ではないのだが、朱文が「文壇は江湖の如くだ」<sup>6)</sup>と言うように、朱文たちのなかには“江湖”という感覚があり、兄貴分とその弟分という関係性が透けて見えるのだ。“断裂”行動は、そういった青年作家たちが参加した活動であるという側面があることは見逃せない。

## (2) 韓東

一方の韓東は、1961年5月17日に南京で生まれた。父親は作家方之である。8歳の時に、両親とともに蘇北の農村に下放をしている。

1978年に山東大学哲学科に入学したが、その翌年10月、父方之を病気で亡くす。この年、雑誌『今天』に触れたことで触発され、80年に雑誌『青春』で詩歌を発表することになった。山東大学哲学科を卒業したのち、82年から93年まで、西安で2年、南京で8年、大学で哲学を教えていたが、93年に辞職した。94年10月、広東省青年文學院の招聘を受けて、2年間の契約作家になり、専業作家となる。朱文たちと異なり、中国作家協会会員でもある。

“断裂”行動のときには、作協会員であることを指摘されたこともあるが、「備忘：有関“断裂”行為的問題回答」のなかで「質問者の指摘はおそらくわたしが作家協会会員であるというこの事実を指しているのかもしれない。わたしが言いたいことは、自らの潔白を示すために作家協会を退会することはないということだ。ある日わたしは作協から退会することを宣言するかもしれないが、それも個人的なイメージの必要性からではなく、それによってある種の原則的な問題における態度の表明をしたいだけだ。名義上作協会員であるのかどうかは、わたしにとってもともと重要ではなく、わたしのそれ（作協）に対する自分の評価には影響しない」<sup>7)</sup>と述べている。この文章で、彼は会員という名義が自分にとっては重要なファクターではなく、会員であるなしが自分の本質を決めるものではないことを宣言し、作協からの退会はしなかった。

韓東の創作はもともと詩歌が中心で、80年代には自ら主編の民間雑誌『他們』<sup>8)</sup>を刊行し、「第三代詩歌運動」の代表的な詩人の一人として知られていた。このころの代表作は「有関大雁塔 [大雁塔に関して]」（『他們』第一輯、1985年3月）であるが、タイトルの「大雁塔」は朦朧詩の代表作の一つである楊煉「大雁塔」を想起させ、韓東が雑誌『今天』の強い影響を受けたことをうかがわせる。1990年代になって、小説の創作を始め、朱文と同じく“新生代 [新しい世代]”や“晩生代 [遅れてきた世代]”などと称される作家群の一人と目され、多くの小説を発表している。

近年長編小説『扎根 [根付く]』（『花城』2003年第2期／人民文学出版社，2003）でも注目を集めたが、この作品からも韓東にとって父親の存在と下放の体験が大きな影響を与えたことがうかがえる。韓東「小東的画書 [東<sup>トン</sup>ちゃんの絵本]」（『收穫』1996年第2期）の主人公とその父親方之は韓東とその父をモデルとしていることは、張鈞が「從“断裂”説起… [“断裂”から話そう]」（『芙蓉』1999年第3期）で指摘しているが、この作品から韓東にとって父親の「死」が大きな影響力を持っていることが分る。

ここで「小東的画書」について、簡単に見ておく。物語は主人公が父親の古い友人から父親方之（韓建国）がかつて自殺未遂をしていたという事実を知ったことから始まる。その事実を母親が月日を経てもなおひた隠しにしていたことを周りは知らなかったのである。

それを機に、主人公は父親の「死」にいたる経緯と生前の父親についての回想に浸るのだ。そこには作家としての父親というよりは、下放によって農村で働く労働者としての姿や“海東青”というワシの一種をほめたたえる姿などが描き出されてゆく。そのワシの名前に「東」の文字が入っていることから、父は息子に海東青のように勇敢で恐れを知らないようになってほしいと望むのだった。

そして父は服毒自殺をはかったのであった。幸いにして、父の自殺は未遂で終わった。しかし自殺未遂後に毒が体から抜けきらず、ペニシリンに依存してゆき、そして肝臓癌で亡くなったことが語られてゆく。

作品で最も紙幅が割かれているのが、父親が亡くなる前後からその葬式にいたるまでの過程である。父親が肝臓癌で長くはないことを、母親が本人にも息子にも徹底して隠したことで、主人公は父親の病気を重篤なものと考えずにいた。父親が自分の手紙を待っていたことも分かっていたが、大学に戻ると手紙を書くことをしなかった。

彼にとって、手紙を書かなかったというその事実が重くのしかかることになるのだが、なによりも第六感が働かなかったことが悔やまれた。自分とは違い、兄は父が亡くなるその時に感じるものがあったという事実から、兄に嫉妬を覚えるほどであった。どうして自分は何も感じなかったのだろうか。

そして父親の死の知らせを受けて家に戻ると、そこには葬式の準備のために家にいた祖母やキリスト教徒でもあるおばの姿があった。その重苦しい雰囲気<sup>クワイ</sup>にいたたまれず、主人公は外で用事を済ましているほうが気楽だと感じる。しかし主人公にとって、父親の死が大きなしこりとなってゆくのである。

時代が変わって、比較的自由的な創作ができるようになった。父親と同世代の作家たちが活躍の場を得てゆくなかで、主人公は考えるのだ。父親が長生きをしていて、今創作活動をしていたらどうだったろうか。もちろん母親も医療設備が変化したことで、父親が死なずにすんだのではという思いを抱いて、父親が今生きていればという話をする。主人公もこんな意味のない想像をしてしまう自分をどこか可笑しいものと感じているのだが、それでも想像をしてしまう

のだ。

作品の最後は父を慕う青年作家と父の墓前に参る場面である。そこには父親の墓誌が掲載されている。張鈞によると、この墓誌は作家方之の実際の墓誌とほぼ同じものということである。作品では、紙銭とともに友人と主人公の生原稿が燃やされ、作家方之へのオマージュとされる。そして物語は静かに幕を閉じるのだった。

「小東の画書」に見られるように、韓東の作品には朱文のような非日常的な感覚やアンバランスさは見られない。この作品では克明に主人公の感情を追っているわけではないが、父に手紙を書かなかった後悔や兄にはあった予感が自分には訪れなかったことが酷薄な自分を象徴しているように感じられたという息詰まる感覚、そして父親と同じ職業である作家を選択したこととより父の存在を近く感じる主人公の確かな感情が伝わってくる。

韓東は文革終息以前の「時代」の傷を、父親の思い出という感傷として有している。朱文が現在という時間軸に重きを置いているのに対して、韓東は家族とくに父親を通して過去へと時間軸を遡り、『扎根』のように父親の生きた時代や父親（『扎根』では老陶）に帰属した部分への強いこだわりを感じる。

韓東は朱文のようなエキセントリックな描写方式は取らない。しかし評論家が彼らの世代を称した“晩生代”の作家の多くと同じように、作品が“個人化”，私化しており，また朱文と同じく内面化してゆく傾向が見られる。

韓東も朱文もその詩のスタイルでは“先鋒詩歌<sup>9)</sup>”と称される一群に属しているとされている。崔志遠（2005）は“先鋒派”の小説スタイルとしては、文面そのものに深化してゆくものと、内面に深化してゆく二つの傾向が見られることを指摘しているが、詩歌から小説に移行した韓東や朱文にも同じ傾向が見られる。

つまり彼らの作品は内面化され、それがゆえに個人化している。ここに“断裂”行動の一つの背景が浮かんでくる。そのことについては、次の節で詳述したい。

### 3. “断裂”行動

1998年に行われた“断裂”行動であるが、ここで言う“断裂”とは何を指しているのだろうか。韓東は“断裂”は“隔絶”はなく、「同じ時代にも性質の異なった創作がある」<sup>10)</sup>とし、同じ時代空間に世代間の違いというものが存在することを指摘している。つまりある種のジェネレーションギャップの存在の宣言と言える。

そもそもジェネレーションギャップ<sup>11)</sup>という概念は西洋からもたらされたものである。『第四代人』<sup>12)</sup>ではジェネレーションギャップが若者にもはやされた原因としては、伝統への反動ということを挙げている。“断裂”行動も同じように、伝統とまでは言いきれないかもしれないが中国建国ないし新文化運動から続いてきた文学の流れと現状への「反動」に起因して

いる。

『第五代人』<sup>13)</sup>「引言」に、「80年代始め、ジェネレーションギャップという概念が最初に中国に入ったときには、大きくも小さくもないショックが走った。中国という孝道を重んじる社会において、ジェネレーションギャップの存在を認めることはある種の不孝であった」<sup>14)</sup>と述べられている。

つまり“断裂”を宣言するということは「不孝」でもあり、“弑父〔父殺し〕”<sup>15)</sup>とも目されることであった。もちろん韓東は父殺し行為ではないと否定をしており、“断裂”行動は「今ある文学秩序に反対する」<sup>16)</sup>ことであったと述べている。彼らの主張する「文学秩序」とは、作家協会という体制や雑誌などに代表される出版システムを含めた現存の体制そのものなのだが、その具体的な矛先については“断裂”行動そのものを見る必要がある。

それではまずは“断裂”行動の過程を追ってみよう。

### (1) “断裂”行動、その過程

すでに述べたが、1998年5月1日に朱文が“断裂”行動を思い立ったことで、この活動は始まった。その後、朱文を中心として韓東らと話し合った結果を反映させたアンケートが作成された。翌日の2日には、朱文と韓東がアンケートの草稿を作成したが、魯羊<sup>17)</sup>と討論をしたところ、彼もこの行動に賛同したことで、3日にそれぞれがアンケートの「前言」を起草することになった。結果、「前言」は韓東が担当することになった。

5月4日には調査の対象を考え、50～100名のリストが作成されたが、5、6日は再びアンケートの推敲に戻り、周囲の作家の意見を求めた。それにより、彼らの周囲にいた作家たちが活動に興味を持ち始めた。アンケートは当初10項目が予定されていたのだが、現在の13項目と決まったのは9日である。7日に発起人は朱文一人の名を付すことが決まっていたので、最後の作業は朱文が行った。

「“断裂”記事」(『“断裂”:世紀末的文学事故』)では、5月10日に楚塵<sup>18)</sup>がアンケートのコピーをし、郵便局に送りに行ったとしているが、「附録三 工作手記〔活動記〕」(『北京文学』1998年第10期)では、5月12日から73人の青年作家に発送されたとされている。

アンケートは当初中国の全国30か所50名の青年作家に発送される予定であったが、何人かの作家が電話で行動に参加したい旨を伝えて来たため、人数が増えることになった。

もともと6月30日でアンケートの返答を締め切る予定であったが、あとから参加を希望する作家がいたことで、7月13日をもって締め切られることになった。アンケートには提出期限が明記されていたわけではなかったが、この日までに55名の解答が得られたという。

アンケートの内容については、結果を公表する前に、朱文を発起人として、『街道』や『文友』、『嶺南文化時報』に発表された。このとき13の項目の内容は全て公表されたが、ここではアンケートの内容の公表及び討論にとどまっている。

アンケート結果を公表した『北京文学』（1998年第10期）に付された「附録三 工作手記」によると『嶺南文化時報』は印刷の間違ひが多く、『街道』はアンケートのみの掲載にも関わらず第13項を断固として削ろうとしたのみならず、「工作日誌」の最後の一文を改ざんし、極めて悪質であったと述べている。

アンケート回収後、陳明洋「一份挑戦文学秩序の問卷 [文学秩序に挑戦したアンケート]」（『南方周末』1998.8.21）のなかで、アンケートの結果の一部が報道された。この記事には、朱文と韓東へのインタビューが掲載されている。同日、『精品購物指南』（1998.8.21）に「断裂：一份問卷和五十六份答卷 [断裂：アンケートと56の回答]」が掲載されたが、この記事は未見である。

次に翌週の8月28日付の『東方文化周刊』<sup>19)</sup>に「溝通我們的一份問卷 [われわれと意思疎通をさせるアンケート]」（『東方文化周刊』1998年第34期）が掲載された。この記事に付された、“断裂”のアンケート項目について見てみると、ここでは13の質問項目は全て掲載されている。しかし結果については、13番目の「あなたは全身に緑の服をまとった人を青虫のようだと思いますか」<sup>20)</sup>という既成概念への挑戦とも言うべき質問項目はなく、細かい内容についても触れられず、ただ解答のパーセンテージを挙げるのみである。ただし『東方文化周刊』には韓東「備忘：有関“断裂”行為的問題回答 [備忘：“断裂”行動の問題についての回答]」<sup>21)</sup>も付されており、“断裂”行動の意図などへの説明は加えている。

その後、『深圳風采周刊』（1998.9.7）で、「打開文学這扇窓 [文学と言う窓を開けて]」というタイトルで“断裂”行為への討論会が行われ、『北京文学』（1998年第10期）にて、朱文「断裂：一份問卷和五十六份答卷」と韓東「備忘：有関“断裂”行為的問題回答」の全文が公開されることになった。

このアンケートの公表経緯で、一番ネックになったのが最後の質問である「あなたは全身に緑の服をまとった人を青虫のようだと思いますか」なのだが、この質問自体はデータを数値化していない。そのため結果としてデータが出ていないのは当然なのだが、アンケートの各項目へのアンケート回答者の回答そのものが触れられていない以上この項目が浮いてしまうことになった。

実は朱文はこの質問については「冗談だ」<sup>22)</sup>と述べている。この質問は朱文なりのユーモアに彩られたもので、彼自身が「附録三 工作手記」（p.40）でこれはアンケート参加者への「謝意」と述べている。しかしこのユーモアは全員に通じたわけではなく、電話で質問の意図に対して問い合わせがあったことから、「上手くいかなかった冗談」<sup>23)</sup>と認めている。しかしこの冗談こそが、“断裂”行動のある種の性格を象徴していると言える。

実は、この質問は朱文が「われわれの身近にいるやせっぽちの友人が、ある日突然全身緑色の服を着てきた。たった一度着ただけなのに、『青虫』という綽名をしっかりと勝ち取ったのだった。このことからインスピレーションを得た」<sup>24)</sup>と語るように、本来は「内輪受け」に

すぎないものであった。自分の友人たちが「緑の服＝青虫」とした、その発想の貧困さを皮肉るように、この第13項を設けたのである。この項目はまさに朱文の創作スタイルそのものと言えよう。自分の身近にあるエピソードを揶揄しながらも、実は既成概念にとらわれている全てのもの—ここでは既存の体制を批判し、「緑の服＝青虫」としか考えることのできない単純な発想をする人たちを「笑い」に転化しようとしたのだった。

ところがこの試みは失敗をしたのだった。それは日本における「ポストは赤い」といったすでにできあがった既成概念とは異なり、“断裂”行動に参加した作家たちにとっても「緑の服＝青虫」が当然の既成概念であり、単純な思考を象徴するとは思われなかったために、作家の一部が朱文の意図を理解することができなかったのだ。それゆえに、この質問は「上手くいかなかった冗談」になってしまい、「内輪受け」レベルのものに帰結してしまったのである。

しかし“断裂”行動のなかで、異彩を放つ質問はやはり第13項の質問である。このユーモアを解するかどうか、これがまさに朱文たちの自他を分ける一つの指針とも言えた。この項目は朱文たち特有のユーモアを備えた既成概念への挑戦でもあった。ところが朱文に同調する青年作家たち以外の目にはたわいもない「遊び」のように受け取られ、“断裂”行動の報道や評論あるいは討論でも扱われることがなかった。もちろんこの質問はまぎれもなくたわいもない遊びなので、真剣に論じてはいけぬ。しかしここに朱文たちと既存のメディアとの意識の差が顕著に表れているのである。この第13項を切り捨てるか否か、この点こそが“断裂”行動をほんとうに理解しているかどうかという指針なのである。

## (2) アンケートとその分析

“断裂”行動への参加は自主的であり、強制されたものではない。事実、多くの賛同者を得たのではあるが、アンケートを送付されたメンバーのなかで、2名が行動に参加することを拒否した。その2名は「あなたたちは今順調に創作発表しているというのに、どうしてまた既存の文学秩序に反対しようとするのか」<sup>25)</sup>という疑問を、呉晨駿に投げかけてきたという。

実はアンケートの結果は名前を挙げ、彼らがいかなる回答をしたのかが発表されている。その全てがすでに作品集を出版したことがあるなどの活躍を見せている作家というわけではないのだが、行動に参加することをよしとしなかった人たちのなかには、アンケートの主旨に賛同することで、何らかの不利益を得ることを危惧する向きがあったのではないだろうか。

ここで、アンケート<sup>26)</sup>の質問項目を見てみることにする。

1) 中国現代作家<sup>27)</sup>のなかで誰があなたに見過ごすことのできない影響を与えたことがある、あるいは与えていると思いますか。

50, 60, 70, 80年代の文壇で活躍した作家たちのなかで、あなたの創作にある種の根本的な手本となる人がいますか。

- 2) あなたは中国現代文学批評があなたの創作に重大な意義があると思いますか。  
現代評論家にはあなたの創作に指導を行なう権利あるいは十分な才覚がありますか。
- 3) 大学、専門学校での近現代文学研究があなたにどのような影響を与えていますか。  
あなたは本当の創作現場を鑑みて、このような研究が成り立つと思いますか。
- 4) あなたは漢学者の自分の作品に対する評価を重視しますか。彼らの観点は重要ですか。
- 5) あなたは陳寅恪、顧準、海子、王小波などがわれわれの崇拜すべき新しいアイドルだと感じますか。  
彼らの本はあなたの創作に影響がありますか。
- 6) あなたはハイデガー、ロラン・バルト、フクス、フランクフルト学派……の本を読んだことがありますか。  
あなたはこれらの思想の権威あるいは理論の権威があなたの創作に影響があると思いますか。  
それらは進行中の中国文学に必要なものですか。
- 7) あなたは魯迅を自分の創作の模範としていますか。  
あなたは思想の権威としての魯迅は現代文学に指導の意義があると思いますか。
- 8) あなたはキリスト教、イスラム教、佛教などの宗教教義を最高の原則としてあなたの創作の模範としていますか。
- 9) あなたは中国作家協会のような組織やメカニズムがあなたの創作に適切な助けとなっていると思いますか。  
あなたはそれにどのような評価を下していますか。
- 10) あなたは雑誌『読者』や『収穫』が代表する趣味や標榜する立場をどのように評価しますか。
- 11) 『小説月報』、『小説選刊』などの文学選刊について、あなたはそれらが中国の目下の文学の状況と過程を本当に表すことができると思いますか。
- 12) 茅盾文学賞、魯迅文学賞について、あなたはそれらの権威性を認めますか。
- 13) あなたは全身に緑の服をまとった人を青虫のようだと思いますか。

このアンケートの項目を見ても分かるように、現在から過去に活躍した作家や批評家を含め、現在の文学的風潮—早世した作家が作品のいかににかかわらず、もてはやされることを暗に批判する項目が並べられている。それだけではなく、第9項では中国作家協会というシステムを、第10、11項では作品の発表の場でもある有名な雑誌を、批判しているのである。

アンケートというのは得てして恣意的なもので、アンケート作成者の意図した結果を導くようにはできている。“断裂”のアンケートも同様で、例えば、第1項1つ目の質問には「見過ごすことのできない」<sup>28)</sup>、2つ目には「根本的」<sup>29)</sup>、第2項1つ目には「重大な」<sup>30)</sup>などの文言

を入れることで、より自分たちの望むデータが出やすいようにしている。実際、第1項の回答では、陳衛は「見過ごすことのできない」影響：なし。「根本的な」手本：なし<sup>31)</sup>とし、張旻も「影響はあったが、今は覚えていないので、“見過ごすことのできない”ものではない。“根本的な手本”は存在しない<sup>32)</sup>」というように、強調された文言に反応した回答が見られる。

ここで「附録二 答卷数拠統計 [アンケートデータの統計]」(『北京文学』1998年第10期)を見ておくと、概ね否定的態度を示すデータが90%以上を占めることになった。数値が比較的低いものを挙げておくと、第1項1つ目では69%が否定、25%が肯定、6%が態度を保留、第4項では81%が否定、19%が未回答か態度を保留、第10項1つ目では56%が否定または批判、29%が評価せず、15%が肯定、第10項2つ目では52%が否定または批判、40%が評価せず、8%が肯定した。

ここで着目すべきは第10項の質問であろう。第10項は「あなたは雑誌『読者』や『収獲』が代表する趣味や標榜する立場をどのように評価しますか<sup>33)</sup>」という質問で、1つ目のデータが雑誌『読者』に対するもので、2つ目が雑誌『収獲』に対するものになる。『読者』<sup>34)</sup>は中国文壇のなかでも思想的なものに関わる文章を掲載する雑誌であり、『収獲』は全国レベルの文学雑誌の一つである。謂わば、中国文学における文壇を代表する雑誌二誌と言っても過言ではなかろう。

一方、同じ雑誌でも第11項で挙げられた『小説月報』と『小説選刊』に対しては、91%が「完全に否定的な態度」<sup>35)</sup>を取り、9%が評価せずで、肯定したものはなかった。この二誌はいずれも転載雑誌で、既刊の雑誌のなかからよい作品あるいは読むべき作品をピックアップして掲載している。

この2つの項目の結果は面白い。否定的な態度を取っている作家は、『読書』であろうが『収獲』であろうがお構いなしに否定をしているのだが、“断裂”行動の賛同者であろうとも、3、4割の作家が明確な回答を避けたのである。これは先に挙げた“断裂”行動を拒否した2名も同じであろう。この結果には、多くの作家が『読者』や『収獲』に掲載してもらえるのであれば掲載してほしいと思っている本音の部分が見え隠れする。だからあえて態度は保留し、明確な批判は行わなかった。もちろん『小説月報』などの転載雑誌についての質問が掲載作品の選択の意義を問うていることも、否定の立場が多くなる原因ではあるが、それにしても第10項とは大きく数値が異なっている。

これはやはり『小説月報』などの転載雑誌とは違い、活躍の場を求めるとはまだ文壇では無名の作家たちにとっては作品を発表できなければ意味がないのである。すでに『収獲』で作品発表を経験している朱文が『『収獲』の凡庸さは典型的である』<sup>36)</sup>と言えるとしても、発表の場を得ていない作家には言いにくいのだ。このような批判ができることから、朱文たち「成功者」や「受益者」がどうして今ある文学秩序を破壊する必要があるのかという批判を招いたのでもあった。

汪継芳がインタビューした前衛美術の評論家である栗憲庭も「文学が社会の場に出るのに、頼るのは文学刊行物や本などの出版物だが、出版は中国では国により厳しく管理されている。しかし美術は、70年代末から今までに、3度の大きな“民間展覧”のブームがあった」<sup>37)</sup>と述べているように、作家にとって「出版」はその表現を最大に生かせる場であるのだ。もちろんアングラ出版やインターネットの利用による「地下」活動もできないわけではないが、それでは職業作家としては成り立たないのだ。

しかし実際は“断裂”行動で否定的な態度を取ったからと言って、『収獲』などの雑誌から締め出されたわけではない。例えば、呉晨駿は「それらは軟弱で、その立場や趣味には興味がない」<sup>38)</sup>と答えていたが、“断裂”行動直後である1999年に、呉晨駿の「可疑的变化 [疑うべき変化]」という小説が『収獲』(1999年第6期)に掲載されている。

次に100%否定的な回答が出た項目についても挙げておくと、第1項2つ目、第2項2つ目、第5項1つ目、第8項となる。これは現在文壇で活躍する作家に見るべきものはいないということ、評論家に刮目に値すべき人物がいらないということ、すでに亡くなった作家などを偶像化して持ち上げる風潮の批判と宗教の否定という項目になる。

特に注目すべきは第1項2つ目の新中国建国後の50年代以降に活躍していた作家の否定である。ここにこの“断裂”行動が広がりを見せなかった要因の一つが浮かび上がる。“断裂”行動では当時中国文壇で活躍していたすべての作家を否定している。それゆえに彼らは当時人気を得ていた、あるいは影響力のあった作家に“断裂”行動に参加するように呼びかけなかったのだ。朱文ははっきりと「附録三 工作手記」のなかで、「別のある作家はさらに有名な作家たちを引き入れたら、影響を拡大することができると、調査の範囲を拡大することを提案した。それは今回の行動の初志に反するので、わたしはそんなことはしないと決めた」<sup>39)</sup>と述べている。つまり朱文は当時の文壇そのものを否定するために、その当事者を引き入れてまで、活動を拡大させようとはしなかったのである。

このスタンスは先に述べた彼らの創作スタイルとも一致しているのではないだろうか。朱文たちは理解されたくて何かを創作するというよりは、自分の考えに同調してくれるか、理解してくれる読者にのみ、自分の内なるものを吐き出すような創作をしている。作品世界はより内面化してゆく傾向があり、「閉じた」世界観と言える。“断裂”行動もまさにこの「閉じた」世界で行われた活動と言える。そのためにこの活動は大きく広がりを見せることはなかった。

さらに参加者の多くが江蘇、上海、北京の作家というのも、アンケートがいかに偏っていたかを示しているだろう。ここでアンケートに回答した56名のリストを挙げておく。

吉林	述平, 金仁順, 劉慶
遼寧	刁斗
広西	東西, 海力洪, 沈東子
広東	楊克, 張梅, 凌越
浙江	王彪, 夏季風
雲南	于堅, 李森
四川	翟永明
福州	呂徳安
湖北	李修文, 葛紅兵
天津	徐江
北京	林白, 李馮, 邱華棟, 金海曙, 李大衛, 賀奕, 朱也眈, 趙凝, 田柯, 侯馬
上海	張旻, 棉棉, 趙波, 羊羽, 夏商, 西颺, 張新穎, 郜元宝, 蔣波
江蘇	吳晨駿, 魯羊, 韓東, 劉立杆, 趙剛, 王大進, 楚塵, 陳衛, 羅望子, 黃梵, 朱朱, 魏微, 朱輝, 林舟, 荊歌, 顧前, 李小山 <sup>40)</sup>

この55名に朱文が加わった56名の回答が発表された。上海、北京の両都市は作家の数も多いということもあり、参加した作家も多かったのであろう。とくに上海は江蘇から近い位置にあるということも影響していると思われる。

参加者の地域を改めて見てみると、「全国30か所」とは述べられているが、限定された地域であることが分る。これでは“断裂”行動そのものも、全国の青年作家の意見の反映をしたとは言にくいのだが、これらのメンバーには“先鋒小説”や“新生代”、“晩生代”、“70年代後”と呼称されている作家が多く含まれており、当時の評論家たちの枠作りにも不満を覚えていたことが、やはりアンケートの第2、3項などに表れている。

さて第9項に「あなたは中国作家協会のような組織やメカニズムがあなたの創作に適切な助けとなっていると思いますか」<sup>41)</sup>という質問がある。“断裂”行動に参加した作家はそのほとんどが中国作家協会の会員ではない。作家協会には市や省のレベルもあるが、ここでは「中国作家協会」と表記されているので、国家レベルの協会を指していると考えていだろう。そうすると協会員になるには、それなりの実績が必要となり、また中国作家協会員にはそれなりのステータスもあるため、会員になりたい作家は少なくはない。しかも会員になると作品発表の義務は生じるものの、給与に近いものが支給されるようになる。また作家協会が主催する雑誌の編集などの仕事をすることもでき、福利厚生を受けることもできる。

つまり収入に困っている青年作家にとっては、会員になるということは収入の道につながることであった。もちろん近年ではお金をもらっただけで、義務である作品の発表を怠っている作家への批判もある。さらに組織に属するということは、それなりの制約を受ける可能性を示唆していた。作協は作家の権利を守る組織であるはずなのだが、実は国家の機関でもある。

“断裂”行動は当時の創作環境に不自由さを感じ、自由な創作環境を得るための活動という側面があった。

質問に対して、韓東は「各レベルの作家協会は地元の権力機構であり、協会は政府を代表して作家を管理している」<sup>42)</sup>とし、黄梵は「官僚機構よりもずっと官僚機構のようである」<sup>43)</sup>とする。徐江は「小さいころは中国作協は作家にお金をくれるものと思っていたので、好感を持っていた」としながらも、作協の本質が分かってからは「作協と聞くと吐き気がする」<sup>44)</sup>と断じている。この質問については挙げればきりが無いほどだが、作協に強い反感を覚えている青年作家が多いことが分る。

前述したように韓東は中国作家協会会員なので、この項目のやり玉に挙がることが多い。しかしすでに述べたように彼は作協会員であることが自分の本質を決めるものではないとし、“断裂”行動に参加した作家たちと同様に反感を露にしている。

ところで朱文は『収獲』に対する質問にもともと『『収獲』の凡庸さは典型的である。それはまさに巴金の凡庸さが典型的であるのと同じである』<sup>45)</sup>としていたのだが、巴金(1904. 11. 25-2005. 10. 17)の危篤のニュースに触れて、後半を削除したと「狗眼看人」のなかで述べている。

朱文にとって、巴金は体制や権力そのものであった。100歳になってなお作家協会主席であったことは、朱文でなくとも批判をする向きがあったのであるが、朱文は「わたしの目には巴金は一銭の価値もない」<sup>46)</sup>と映ると断じている。そしてアンケートで雑誌『収獲』がやり玉に上がった要因としては、巴金が主編を務めていたことが挙げられる。実は第9項の作協批判のあとに配された第10項で『収獲』の批判がなされたのは、朱文による巴金に代表される権力機構や作風の否定でもあったのである。

朱文と韓東の小説では、朱文「五毛銭の旅程 [5角の旅程]」、*「我愛美元」*や韓東「美元硬過人民幣 [米ドルが人民元を席捲している]」というお金の入ったタイトルがどうしても目についてしまう。“断裂”行動の質問項目のなかでは、はっきりと金銭面の不満に対する質問はない。

しかし実際には創作環境に対する不満のなかに、金銭的な不満が含まれている。このことは汪継芳のインタビューに明確に表れている。例えば、韓東は汪継芳に「原稿料で自分を養うことは現実的ではない、普通一年に10万字書ければいいほうで、1,000字60元とすれば、一年に6,000元稼ぐことになる。6,000元で暮らせるかい？」<sup>47)</sup>と述べている。また汪継芳が見た朱文の雑誌『大家』の原稿料は「28.98元」<sup>48)</sup>であったという。朱文は作品のなかでもお金にまつわることをよく書いているが、「我愛美元」では1,000元が主人公の中編小説1本の原稿料であることを述べるなど、青年作家たちの金銭的な環境をせきらかに描いている。

最後に、すべての質問項目を見ていると気づくのは、どの質問も否定的な回答が出るように作成されているアンチテーゼの構造を取っていることだ。その矛先は中国の体制や作家を取り

囲む環境にとどまらず、西洋の思想や宗教にまで向けられている。とくに西洋の思想や理論はそれを知っていることが偉いと言わんばかりにファッション化している傾向があり、これは第5項と同じく偶像化された作家たちの作品が売れる傾向と同じく揶揄している。

韓東は“断裂”とは“隔絶”ではないと言うが、やはりこの質問項目の設定からしても“断裂”行動とは既存の体制や現状に対して「否」を唱えたある種の「拒絶」行動であると考えられる。

もちろん“断裂”行動は自分たちの自由な創作環境を得るだけではなく、自分たち若い世代の原稿料に対する改善を求めるための活動の一貫でもあった。しかしその活動は決して有名作家を巻き込もうとすることもなく、仲間内に限定されたものであった。このことが彼らの活動の限界でもあり、“断裂”行動が広がりを持たなかった要因となった。

このことは彼らの創作スタイルとも無縁ではなく、雑誌『今天』及び朦朧詩の影響を強く受けた韓東や朱文たちは万人に理解される作品を創作するよりも、一部の読者や作家が支持するような言説を用いて、自己の内面を吐き出してゆくのである。しかし朦朧詩とは異なり、彼らの言葉は日常的で分かりやすい。

そのなかでも朱文の独特の言語センスやスタイルは、ある種のカリスマ的な魅力を持ち、それゆえに支持者を生んだ。しかしそのことが“断裂”行動を外に向かわせるのではなく、より内に向かわせてしまい、活動そのものが「閉じた」行動となってしまった。

“断裂”行動は結局単なる世代の断裂であるジェネレーションギャップの宣言ではない。その活動は仲間とそれ以外を分ける自他の断裂であるが、ここに世代というキーワードも含まれる。そしてこの活動は、すべての体制と自分たちを取り囲むすべてに対する「拒絶」の宣言でもあったのである。

#### 4. ポスト“断裂”行動

“断裂”活動はいったん幕を閉じたが、朱文が汪継芳のインタビュー<sup>49)</sup>で、第二、第三の“断裂”行動を起こすことを述べている。ここではそれらの活動をポスト“断裂”行動と捉え、その動きを追ってゆく。

まず“断裂”行動の次の段階として、韓東主編で断裂叢書が刊行された。第一弾として、1999年3月、海天出版社から6名の作家の小説集が刊行された。それは楚塵『有限的交往』、呉晨駿『明朝書生』、顧前『萎靡不振』、賀奕『偽生活』、金海曙『深度焦慮』、海力洪『葉片的精神』の6冊であるが、このときは過去に出版経験のない作家の本を出版することに主眼が置かれた。そのため“断裂”行動の「顔」とも言うべき主要メンバーの作品は出版されなかった。この第一輯は、「“断裂”記事<sup>50)</sup>」にもまとめられており、“断裂”行動の一貫として見ることができる。

1999年は“断裂”行動の第二の活動として、“我仍這樣說<sup>51)</sup> [わたしはなおもこう言う]”という活動が行われた。この活動はあまり大きく取り上げられなかったが、韓少功「馬橋詞典」(『小説界』1996年第2期)が張頤武「精神的匱乏 [精神の欠乏]」(『為您服務報』1996.12.5)でミラロド・パヴィチ『ハザール事典』<sup>52)</sup>の模倣作として批判されたことが発端となり中国で初めて作家が評論家を訴えたことに対する支持の表明であった。

その後、2000年に楚塵が主編となり断裂叢書第二輯として、朱文『人民到底需不需要桑拿』、韓東『我的柏拉図』、張旻『愛情與墮落』、魯羊『在北京奔跑』の4冊が陝西師範大学出版社から刊行された。もちろん第二輯も“断裂”行動の一貫ではあるが、第一輯の主旨である出版経験のない作家を取り上げるということはされなかった。

“断裂”行動のなかには、若い作家の原稿料の安さへの不満、特に詩歌を創作する作家たちの生活苦ということが含まれていたことを考えると、後者の叢書は“断裂”行動が売名行為である<sup>53)</sup>という批判は免れない。それでも第二輯を“断裂”の主要メンバーで固めたのは、金銭が必要であるという背景があったのではないだろうか。

“断裂”行動には自由な創作の場を求め、既存の媒体である雑誌公刊物を否定する側面があったのはすでに見てきた。韓東はその場所をインターネットに求めた。彼は1999年の時点で先鋒文学ネットを作る構想を提案していた。その考えを受けて、翌2000年に成都で楊黎と王鏡が“橡皮酒吧”という直訳すれば「ゴム・バー」なるバーを開店した。そして2001年1月23日に、“橡皮文学網 [ゴム文学ネット]”が開設されることになる。

2003年7月23日に橡皮文学工作室は北京に移されるが、この活動の資金は韓東の考えに賛同した青年作家たちの募金によった。ネットの開設当初に資金を出したメンバーには、“断裂”行動に参加した青年作家の名前も多く見られるが、“断裂”行動では参加を求められることもなかった有名作家である馬原や北村、楊争光、映画監督の賈樟柯、評論家朱大可などの名前が見られる。しかし出資者の多くはやはり無名の青年作家たちであった。

束縛されない創作を求めたがため、広告収入を得るということもせず、2001年4月4日の段階ですでに賛助金を求める「手紙」<sup>54)</sup>がネット上に公表された。しかも率直に「お金がなくなった」と述べ、ウェブサイトの運営ができなくなる旨を訴えているのだ。

その活動は、「1、橡皮文学叢書を編集、出版する。2、文学の人材を扶助し、文学活動を展開する。3、“橡皮文学賞”を設立、管理する」<sup>55)</sup>としている。橡皮工作室のメンバーは5人で、楊軍を主任に詩歌、小説、評論の分野に責任者を置いている。

参加している作家の多くは無名の作家であるが、『橡皮年鑑』<sup>56)</sup>や橡皮文叢<sup>57)</sup>の出版及び郵便販売を手掛けることで、彼らの作品を紹介することと収入の道筋をつけようとしていた。それは橡皮文叢では詩集が多く出版されていた点からも、韓東の姿勢がうかがえる。

さらに橡皮工作室は“橡皮工程 [ゴム・プロジェクト]”を立ち上げ、楊黎が「2004年は橡皮文学網が成立して以来一番反響を引き起こす一年になるだろう」<sup>58)</sup>としていたが、橡皮文学

網は2004年5月1日に閉鎖されてしまった。

この閉鎖にはおそらく資金面の問題が大きかったと思われる。つまり活動には資金が必要であるが、募金には限界もある。そこで、資金を調達するために、断裂叢書の第二輯として、比較的著名な作家の作品集の出版をしたとは考えられないだろうか。事実、韓東は叢書の出版後に“橡皮文学網”を開設しており、第二輯として選ばれた作家は朱文を除いたメンバーがネットの開設に資金を出しているのである。

それだけではなく、韓東の自著の出版と活動時期が一致しているのだ。韓東はほかにも、2002年から“年代詩叢”第一輯を主編し、“他們”文学ウェブサイトを立ち上げるなど活動を活発にしているが、この年河北教育出版社から詩集『爸爸在天上看我 [父さんが空から僕を見ている]』を出版している。また『扎根』を出版した2003年には、“年代詩叢”第二輯の主編をしている。さらには『明亮的疤痕 [明らかな傷痕]』（華藝出版社）と『我和你 [君と僕]』（上海文藝出版社）を出版した2005年には、“北門一作者・導演工作室”の設立に参加している。

韓東が著作料のすべてを活動に費やしているわけではないだろうが、韓東の活動は非常に活発であることが分る。もちろんそのすべてが“断裂”行動の一貫というわけではないが、韓東が“断裂”行動のなかで目指したことはこれらの活動には含まれている。

一方、朱文は第二の行動を起こしたのは、目だった活動が見られない。一つには、2000年5月に朱文は北京に移り住んでおり、“断裂”行動をとともにした仲間たちと距離ができたことが関係しているかもしれない。2001年には、『海鮮』という映画の脚本と監督を手掛け、国際的な評価を得たことで、映像作品の活動が活発化してゆく。また創作のほうも2006年から活発になったが、朱文のほうは自身の創作以外では“断裂”行動のような活動が見られない。

つまりポスト“断裂”行動から見てとれるのは、活動そのものの主体が朱文から韓東へ完全にシフトをしてしまっていることである。そもそも“断裂”行動のなかでも、朱文は発起人という立場ではあるが、アンケートの作成や“断裂”行動の意義を宣伝する活動においては韓東の動きが目立つ。

“断裂”行動では朱文は「兄貴分」であり、その発言は影響力があった。また彼の独特の表現方法に、ある種のカリスマを感じた人々が彼を中心に集まったのである。しかしその活動の半ばからは、朱文はカリスマ的な存在として、“断裂”行動のシンボルと化してしまった。その一方で、韓東が活動の実質的な部分に積極的に関与していたと考えられる。もちろん“断裂”行動のさなかには、活動の主体が朱文から韓東にはっきりと移行しているわけではなく、朱文の存在感は異彩を放っていると言える。しかしポスト“断裂”行動では、朱文の活動は沈黙してゆき、韓東のほうは積極的な動きを見せ、活動の主体が韓東に完全に移ってしまったのである。

韓東の活動は続いているものの、現在もなお大きな広がりを見せることはない。それは“断裂”行動の持っていた閉鎖性が、ポスト“断裂”行動にも受け継がれてしまっているからであろう。

## 5. おわりに

“断裂”行動とは、結局どのような活動であったのだろうか。それはアンケートを通じての青年作家たちの叫びであった。その叫びは、現状への不満をぶちまけるかのように、あらゆるものを否定していった。否定されたのは既存の中国文壇と組織だけではなく、評論家や思想と、彼らを取り巻くすべてのものであった。

アンケートの形式はアンチテーゼの構造を取っているため、「否」という回答が導かれる。そのことから“断裂”行動は「拒絶」の宣言と称することができる。あらゆるものを拒絶してしまったがため、この活動を拡大するために有名な作家や権力を持つ作家を巻き込むことができなかつた。そればかりか、そういった作家たちも批判の対象となったのである。

“断裂”行動は一度限りの行動ではあったが、ポスト“断裂”行動とも呼ぶべき活動は継続された。活動はしだいにその主体が朱文から韓東へと移行してゆく。それは“断裂”行動の半ばから見られる傾向であった。朱文は行動の発起人ではあったが、アンケート作成や意義の宣伝では韓東が積極的な動きを見せている。しかし“断裂”行動においては、朱文の存在は欠かせず、彼特有のユーモアや言説に「兄貴分」としての魅力を感じ、賛同する仲間たちが次々と行動に参加したのである。その点で朱文はカリスマ的な存在で君臨していたと言えるが、次第に形骸化し、実際の活動は韓東に移ってゆくのである。

“断裂”行動はすでに活躍の場を得た恵まれた青年作家が起こした活動と見る向きもあるが、詩人としても活躍していた韓東にとって、冷遇されている青年作家、そのなかでも生活苦を強いられている詩人を支援することは火急の課題であった。そのためインターネット上に文学サイトを開設し、募金を集めては、自由な創作の場と作品発表と出版の機会の提供を行っていたが、資金面で無理が生じて、この活動も大きなものにはならなかつた。

ところで“断裂”行動のなかには、中国作家協会の否定というものが含まれていた。「対匿名者の公開回答」で、ある匿名者が指摘しているように、作協は1998年にその経費を前年度より3分の1に削減され、翌1999年に民間組織に変わっている。その後、有名無名の作家たちの作協からの退会が相次ぐことになるが、それは2003年7月8日に『長沙晩報』が湖南の作家余開偉と黄鶴逸が相次いで湖南省作家協会を退会したことを報じたことに始まる。その後、2003年10月10日、李鋭が山西省作家協会副主席を辞任し、さらに作協からも退会することを宣言した。その時、李鋭と同じく山西省作家協会副主席であった張石山と一緒に辞職、退会をした。山西の有名作家二人の退会は大きく報じられ、作家協会の体制改革を促す行為として、作協の性格と作用について討論がなされるようになったのである。このように作協からの退会が続いたのは、湖南の作家二人の退会が呼び水になったと見てよい。

つまり作協から退会者が相次いだことは、“断裂”行動がなにがしか影響を及ぼしたわけではないのだ。しかし作協の変革と解体が始まるまさにその年に“断裂”行動は起こったのであ

る。それは古い中国文壇の終わりを告げる予兆であったとも言える。それと同時に、この退会劇が示すように、活動を大きなものにするためにはやはり影響力のある作家の存在が欠かせないことが分る。

ここから分るように、“断裂”行動が広がりを見せなかったのは、やはり全国的な影響を及ぼす作家の参加がなかったことが大きな要因である。朱文を兄貴分として慕い、カリスマ的な魅力を感じる人たちもいたのだが、当時はまだ朱文の周囲にいた仲間と呼べるような人に限られていた。そのため“断裂”行動は「閉じた」活動となってしまったのである。

結局、“断裂”行動はあらゆるものを否定することに終始してしまった。もちろん断裂叢書の刊行や活動に参加した作家の活躍の場を広げる一応の成果は得られている。しかし彼らの行動は大きな影響は持ち得なかった。それは活動自体が内輪の「閉じた」活動であったこと、そして“断裂”行動がジェネレーションの断裂の宣言というよりは、仲間とそれ以外を分ける自他の断裂であり、そして既存の体制に対する「拒絶」の宣言であったことに起因しているのである。

#### 注

- 1) 原文は「“断裂”行為」。
- 2) 『北京文学』(1998年第10期, p. 19)で、編集者の言として、「『共産党宣言』発表150周年、戊戌変法100周年、さらには思想解放20周年」なので、「特殊な一年」であると述べられている。
- 3) 1966年5月1日、江蘇省泰興に生まれる。1989年、東南大学動力工程科を卒業した。大学在学中から詩歌の創作を始める。92年からは小説の創作も始めた。電力研究所でガスタービンをデバッグする仕事をしていて、95年末に辞職をした。  
代表作は「郷土四章」(『今天』1994年第4期)、「照片」(『人民文学』1996年第3期)など多数あり、小説集も出版されている。
- 4) 78年12月「北京の春」の間に創刊された、一種の同人誌。『今天』(Today)は当時青年たちの熱狂的な支持を受けた雑誌であるが、80年9月に出版登録をしていないことを理由に強制的に停刊をさせられる。その後も形を変えて発刊を続けたが、同年12月にすべての活動が停止させられた。  
1991年夏に、編集部をオスロ(復刊第二期からストックホルム、その後はニューヨーク)に置き、『今天』が復活し、海外を拠点に活動を続けている。
- 5) 発表年など不明。朱文『我愛美元』(作家出版社, 1995)所収。
- 6) 原文は「文壇就如江湖」(「狗眼看人」『「断裂」:世紀末の文学事故』p. 326)。「狗眼看人」の原載は『芙蓉』1999年第5期で、この文章は断裂叢書を出版するにあたって書かれた。“江湖”とは武侠小说でよく使用される用語であるが、武に生き、侠に生きる人々にとっての世間や世界を指す。
- 7) 『北京文学』1998年第10期, p. 44。「4, 你們是受益者, 為何還要發起這一行為? [4, あなたたち受益者が、どうしてまたこの行動を起こさねばならなかったのか]」という項目のなかで、述べている。  
原文は以下。  
「提問者の指責可能針對我是作家協會會員這一事實。我要說的是：我不會為了表明自己的清白而退出作家協會。也許有一天我會宣布退出作協，那也不是因為個人形象的需要，而是要借此舉在某些原則問題上表態。名義上是否是作協會會員對我從來不重要，並不影響我對它(作協)作為自己的評價」。
- 8) 85年から95年までに、全部で9期発行された。
- 9) 羅振亞『朦朧詩後先鋒詩歌研究』(中国社会科学出版社, 2005)参照

- 10) 原文は「在同一時間内存在着性質不同的写作」（「对匿名者的公開回答」『東方文化周刊』1998年第42期）。
- 11) “generation gap”。中国語では“代溝”という。楊東平『城市季風』（東方出版社，1994）によると，1980年に『編訳参考』（1980年第6期）に掲載されたイギリス人マイケル・ヤフダ（Michael Yahuda）の「中国政治接班問題」が中国に政治的な「世代」の概念を持ち込んだ最初のものであろうとしている。その後，中国でもさまざまな形での世代の定義が打ち出されていった。
- 12) 張永傑，程遠忠，東方出版社，1988。  
楊東平（『城市季風—北京和上海的文化精神』p. 392）によると，世代の区分の理論のうち，“四代人 [四世代の人]”の理論は，1985年に柯雲路が小説「新星」（『当代』増刊，1984年第3期）で提起したという。さらに楊は88年に出版された『第四代人』が初めて「現代中国の世代文化と世代間の特徴を詳細に研究した専門書」（p. 392）であるとし，中国におけるジェネレーション区分の先駆的な研究書と位置づけている。
- 13) 武俊平，天津教育出版社，1998。  
『第四代人』以降に登場した世代である“第五代人（70年代から80年代の中期に生まれた世代を指す）”について書かれた専門書。筆者である武俊平はこの“第五代人”について発言する研究者の一人であり，『第五代人』ではこの世代の特徴を考察し，定義づけを試みている。
- 14) 原文は「80年代初，当代溝這個概念最初引入中国時，引起了一場不大不小的震動。在中国這個講究孝道的社会中，承認代溝的存在似乎也是一種不孝」（『第五代人』p. 3）。
- 15) 韓東「備忘：有關“断裂”行為的問題回答」（『北京文学』1998年第10期）のなかで，アンケートが「弑父」行為ではないかという項目を設けて説明をしている。これは「與朱文，韓東對話 [朱文，韓東との對話]」（『南方周末』1998. 8. 21）のなかで，記者がギリシャ神話の父親殺しのような指摘したことに依ったのだろう。
- 16) 原文は「我們反对現有的文学秩序」（「对匿名者的公開回答」『東方文化周刊』1998年第42期）。
- 17) 本名，許金林。1963年3月，江蘇省海安に生まれる。1980年，南京大学外国語学部日本語専攻で学んでいたところに，詩歌の創作を始める。84年，卒業後，中国社会科学院の大学院に進学をし，日本文学などを学ぶ。1987年，文学修士を取得する。90年から小説を書き始めた。  
断裂叢書の第2輯として魯羊『在北京奔跑』（陝西師範大学出版社，2000）も刊行されている。
- 18) 1969年9月25日，江蘇省興化に生まれる。地質関係の仕事を数年間したことがある。1995年，南京大学中国語学文学科を卒業し，97年1月から本格的に創作を始めた。
- 19) 南京市にある江蘇廣播電視總台報刊中心が主催する週刊紙。
- 20) 原文は「你是否認為穿一身綠衣服的人就像一只青菜虫子？」（『北京文学』1998年第10期，p. 37）。
- 21) 参考文献には提示しなかったが，『東方文化周刊』（1998年第34期）にも掲載されている。本稿では『東方文化周刊』版は一部削除されているため，『北京文学』版を使用した。
- 22) 原文は「玩笑」（附録三 工作手記『北京文学』1998年第10期，p. 40）。「悪ふざけ」とも訳せる。
- 23) 原文は「不成功的玩笑」（『北京文学』1998年第10期，p. 40）。
- 24) 原文は「靈感来自于我們身邊的一個瘦瘦朋友，他有一天忽然穿着一身綠衣服，只穿一次就為他牢牢地贏得“青菜虫子”的綽号」（附録三 工作手記『北京文学』1998年第10期，p. 40）。
- 25) 原文は「你們現在写作發表得都很順利，為什麼還要反对現存的文学秩序？」（附録三 工作手記『北京文学』1998年第10期，p. 39）。
- 26) アンケートの項目及び結果は，すべて「断裂：一份問卷和五十六份答卷」（『北京文学』1998年第10期）に依る。以下，特に表記がなければ，『北京文学』版に依るものとする。
- 27) 原文は“中国当代文学”。
- 28) 原文は「你認為中国当代作家中有誰对你產生過或者正在產生着不可忽略的影響？」（p. 20）で“不可忽略 [なおざりにできない，見落とすことのできない]”と用いる。
- 29) 原文は「是否誰給与你的写作以一種根本的指引？」（p. 20）で，“根本的”という表現を用いている。
- 30) 原文は「你認為中国当代文学批評对你的写作有無重大意義？」（p. 21）で，“重大”と強調する。
- 31) 原文は「“不可忽略”的影響：没有。“根本的”指引：没有」（p. 20）。
- 32) 原文は「有過影響，但不是“不可忽略”的，因為我現在已經不記得了。不存在“根本的指引”」（p. 20）。

- 33) 原文は「你对《読者》和《收穫》雜誌所代表的趣味和標榜的立場如何評價？」(p. 33)。
- 34) 『南方周末』(1998. 8. 21) では“知識分子刊物 [インテリの刊行物]”と説明している。
- 35) 原文は「完全否定態度」(p. 39)。
- 36) 原文は「《收穫》の平庸是典型的」(p. 34)。
- 37) 原文は「文学在社会上的出場，依頼的文学刊物，書等出版物，而出版在中国都是由国家嚴格管理的。而美術，自七十年代末至今，有三次大的“民間展覽”高潮」(『「断裂」：世紀末的文学事故』p. 4)。
- 38) 原文は「它們是軟弱的，它們的立場和趣味是我不感興趣的」(p. 34)。
- 39) 原文は「另一位作家還建議把調查的範圍擴大，把一些著名作家拉進來，這樣可以擴大影響。我決定不這麼做，因為這有悖這次行為的初衷」(pp. 39, 40)。
- 40) 掲載順は全て『北京文学』(1998年第10期)に順じた。
- 41) 原文は「你認為中国作家協會這樣的組織和機構对你的写作有切實的幫助嗎？」(p. 32)。
- 42) 原文は「各級作家協會是地道的權力機構，它代表政府管理作家」(p. 32)。
- 43) 原文は「它比官僚機構更像官僚機構」(p. 33)。
- 44) 前者が「小時候以為中国作協是給作家發錢的，对它有好感」(p. 33)。後者が「提起它就覺得反胃」(p. 33)。
- 45) 原文は「《收穫》の平庸是典型的，正像巴金的平庸是典型的一樣」(「狗眼看人」『「断裂」：世紀末的文学事故』p. 325)。
- 46) 原文は「在我眼里巴金一錢不值」(「狗眼看人」『「断裂」：世紀末的文学事故』p. 324)。
- 47) 原文は「用稿費來養活自己也是不現實的，一般一年能写十万字就很不錯了，千字六千元，那就是一年掙六千元，六千元能生活嗎？」(『「断裂」：世紀末的文学事故』p. 207)。
- 48) 『「断裂」：世紀末的文学事故』p. 236。
- 49) 『「断裂」：世紀末的文学事故』p. 240。
- 50) 汪繼芳『「断裂」：世紀末的文学事故』。
- 51) 汪繼芳『「断裂」：世紀末的文学事故』では，“我仍然這樣說”(p. 240)としているが，水木清華站 BBS (1999. 4. 22/bbs.net.tsinghua.edu.cn) における表題に従った。
- 52) 東京創元社，1993。原著は1988年に出版されている。
- 53) 韓東「備忘：有關“断裂”行為的問題回答」(『北京文学』1998年第10期)の第一項目に「全国70名の作家にアンケートを送ったのは売名行為では」という項目を設けているように，名前を売るために行動を起こしたという見方があった。
- 54) 「橡皮文学網站尋求社会贊助的公開信」が，BBSに貼り付けられた。贊助を求めているのは，橡皮文学網站であり，以下に韓東，楊黎，何小竹，烏青の四名の名前が記されている。(http://bbs.sina.com.cn/cgi-bin/forumadm/souladm/viewsoul.pl?forumid=16&postid=194387を参照した)
- 55) <http://www.xiangpi.net/about/>
- 56) 楊黎主編，青海人民出版社，2003。
- 57) 第一輯は楊黎『打炮』という詩集で，わずか100冊の出版にとどまった。定価は10元。第二輯は4種で何小竹『写到100首之后』という詩集を含み，詩と小説集を刊行。定価は全て10元。第三輯は予告がされていたが，実際に出版されたか不明。
- 58) <http://www.xiangpi.net/news/>

## 参考文献

<http://www.xiangpi.net/>

「溝通我們的一份問卷」『東方文化周刊』1998年第34期

陳駿濤，於可訓など「遊戲的陷阱—關於《断裂》：一份問卷和五十六份答卷」的對話」『太原日報』1998. 12. 21, 1998. 12. 28

陳明洋「一份挑戰文学秩序的問卷」『南方周末』1998. 8. 21

陳思和，楊揚編『90年代批評文選』漢語大詞典出版社，2001

陳曉明「異類的尖叫—裂與新的符号秩序」『大家』1999年第5期

- 崔志遠『現實主義的当代中国命運』人民文学出版社，2005
- 丁帆，許志英主編『中国新时期小説主潮』下，人民文学出版社，2002
- 郜元宝「在“断裂”作家“没意思的故事”背后」『当代作家評論』2001年第1期
- 韓東「備忘：有關於“断裂”行為的問題回答」『北京文学』1998年第10期
- 韓東，吳晨駿，朱文「對匿名者的公開回答」『東方文化周刊』1998年第42期
- 韓東『西天上』世紀出版集團，2007
- 賀仲明「反抗的意義與局限」『小説評論』2001年第4期
- 洪子誠，程光燁編『第三代新詩』湖北長江出版集團，長江文藝出版社，2006
- 汪繼芳『「断裂」：世紀末的文学事故』江蘇文藝出版社，2000
- 王春林「個人化視域中的日常敘事—評韓東長篇小説《扎根》」『当代作家評論』2004年第4期
- 魏天祥『九十年代文藝新变化研究』中共中央党校出版社，2000
- 吳炫「論“断裂的一代”」『花城』2000年第2期
- 武俊平『第五代人』天津教育出版社，1998
- 楊東平『城市季風—北京和上海的文化精神』東方出版社，1994
- 楊勝剛「没有旗幟的對抗—朱文的写作姿態」『小説評論』2001年第4期
- 張鈞「從“断裂”說起…」『芙蓉』1999年第3期
- 張鈞『小説的立場—新生代作家訪談錄』廣西師範大學出版社，2002
- 張永傑，程遠忠『第四代人』東方出版社，1988
- 朱文「断裂：一份問卷和五十六份答卷」『北京文学』1998年第10期
- 朱文『看女人』世紀出版集團，2007

## *Duanlie*—A Chinese Literary Activism that Cultivated Divisions between Generations: The Ideal and its Consequences

Keiko SEBE

### Abstract

This paper considers the significance of Chinese literary activism called *Duanlie* by analyzing its ideal and consequences. In 1998, the Nanjing-based author Zhu Wen promoted this literary activism that proclaimed fractures between generations. Wen distributed questionnaires to 73 adolescent authors, asking 13 questions, and announced the results to the public.

The questionnaires included criticisms against existing literary circles, their current ill conditions that restricted their freedom of speech, and poor reviews by immature critics. The questionnaires took antithetical methods to lead negative answers and arbitrarily induced to respond negatively by putting the word “fundamentally” in each question. The questionnaires also included a “playful” question at the end, which shows Wen’s unique humor. The question, a humoristic challenge to existing ideas of the time, was characteristic of Wen’s original writing style, but at the same time signified the exclusive aspect of the literary activism.

What Wen and other authors attempted through the activism was not only to express their complaints about earnings and poor conditions, but also to challenge Chinese literary circles at the time. The activism was the expression of refusal, proclaiming “no” to every system they had.

After *Duanlie*, Wen performed the mission by publishing books in series, but his activity itself decreased gradually. In the meantime, another author Han Dong continued the mission by strongly supporting ill-fated young authors, poets in particular, and set up the Xiangpi Net, although it may be difficult to say that his attempt was successful. In a way, *Duanlie* was started by Wen, who was soon turned into a symbolic charismatic figure, and Han Dong took over the charge in real terms. The main force behind the group shifted to Han Dong after *Duanlie*, although a tendency in this direction had preexisted.

One of the reasons *Duanlie* was not completed successfully is that the activism ended up exclusively within the group who agreed with Wen's idea and did not make approaches to other authors. They could have carried out their activity more widely if they had worked on persuading influential authors to join. The "closed" activism faded away, maintaining negative attitudes even towards those recognized authors, and continuous activity even remained limited, not holding an official power. *Duanlie*, therefore, did not only proclaim generational fractures, but also unwittingly forged divisions between the group and set up in opposition to all organizations.

**Keywords:** Generational Fracture (*Duanlie*), Zhu Wen, Han Dong, questionnaires, the Xiangpi Net